

第9話 夏至南風篇

竜宮城再建計画

1

お元気ですか。長かった梅雨が明けて、風の島は夏本番に向かっていきます。暑い日が続くこの季節、島のみんなは東の浜の「海池」へ泳ぎに行きます。海池は岩場の奥にある2メートルの深さの潮だまりで、天然のプールみたいになっているんです。透き通った水の中に入ると、ひんやりと冷たくて、最高に気持ちがいいんですよ。

そうそう。去年、私が海池で涼んでいたら、ウミガメオジがやって来たんです。ウミガメオジはヤマガメオジの遠い親戚で、浦島太郎を背中に乗せた伝説の亀の末裔に当たります。そのウミガメオジが「人手が足りないんじゃない」と言って困っていたので、私が竜宮城へ手伝いに行くことになったんです……。

2

ウミガメオジはチルーにあめ玉を渡しました。「空気あめじゃよ。これをなめると海の中でも息が吸えるんじゃない」チルーがあめを口に入れ、背中に乗ったのを確かめると、ウミガメオジはドボンと海に潜りました。チルーは息苦しくなるのが心配でしたが、不思議と陸にいるときのように呼吸ができます。慣れてくると、周りの景色を眺める余裕も出てきました。

海底からはチンアナゴが顔を出し、クラゲたちがふわふわ泳ぎ、巨大な魚群に圧倒されました。魚たちの間をぬい進み、色鮮やかな珊瑚の森を抜け、ウミガメオジはさらに下へ下へと潜って行きました。

「人手が足りないって言っていたけど、竜宮城が忙しくなったの?」「その逆じゃよ。竜宮城の隣にドラゴンキャッスルという城ができて、バックダンサーのヒトデたちが一斉に引き抜かれてしまったんじゃない。それで十分な舞い踊りができなくなったんじゃない」

人手とヒトデを間違えていたことに気づいたチルーでしたが、せっかくなので、ウミガメオジを手伝うことにしました。



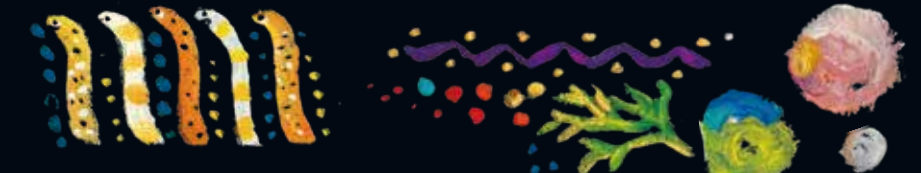
3



たどり着いた竜宮城は、チルーが想像していたものとまったく違いました。外見はポロポロと古く、竜宮城と書かれた扁額も傾いていて、きらびやかな印象はどこにもありません。その一方で、30メートルほど離れた場所にあるドラゴンキャッスルの周りではネオンのように輝く熱帯魚たちがぐるぐると元気に泳いでいます。さらに驚いたのは、竜宮城で歓迎してくれたタイとヒラメの踊りが見ていられないほどに下手だったことです。動きがそろっていないし、プロ意識というものがまったく感じられません。ウミガメオジに聞くと、ドラゴンキャッスルに客を取られて以来、舞い踊りチームがすっかりやる気をなくしてしまったということです。

「こんなの竜宮城じゃないわ! 私の方が上手に踊れるもの!!」失望したチルーでしたが、同時に、胸の内にメラメラと燃え上がるものがありました。チルーは乙姫様と相談して、舞い踊りチームの総監督を買って出ることになりました。

4



竜宮城の倉庫から古いアルバムを探し出すと、チルーはタイとヒラメたちに全盛期の舞い踊りの写真を見せました。そして、自分が子どもの頃に聞いた竜宮城の話をして、どれだけ感動したかを熱っぽく語りました。しかし、タイやヒラメたちは「舞い踊りは古くさい」「ドラゴンキャッスルの方がカッコいい」「私もキラキラしたい」などと不平不満を言うばかりです。

それを聞いたチルーは、客のふりをしてドラゴンキャッスルに忍びこみ、人気の秘密を研究することになりました。



くらびー絵本

風の島の便り
絵 Sava 文 野原 誠喜



5

チルーいる舞い踊りチームのうわさは次第に広まり、竜宮城に少しずつ客足が戻ってきました。700年の歴史を前面に出してアピールすると、若い世代の間からも「古いつて新しい!」と評判が立って、懐かしさを求めて遠い海からお客さんがやって来るようになりました。

「チルー、ありがとう! 竜宮城が昔みたいににぎやかになったわ。お礼にこれを受け取って」

褒美として、チルーは乙姫様から玉手箱をもらいました。「私、まだおばあちゃんになりたくないわ!」「心配しないで。これは新しい玉手箱よ。何が入っているのかはお楽しみ!」

涙、涙、のお別れ会のあと、チルーはウミガメオジの背に乗って家路につきました。久しぶりの風の島は30度を超える暑さでしたが、空気がとびきりにおいしく、風が心地よく感じられました。チルーがドキドキしながら玉手箱を開けると……中にはガラス玉のペンダントが入っていて、ガラス玉の中をよく見ると……タイとヒラメたちが……楽しそうにダンスをしていた。



風の言葉

古いものは、見方を変えれば新しい。

風の名

夏至南風 (カーチーバー)

梅雨明けのあと、夏至の頃に吹く季節風のことをいうよ。夏至南風が吹くと、気温がぐんと上がり、空や海がくっきりとした青色になり、いよいよ夏がやって来るよ。

